

第七章 活用論

活用といふことは、陳述語の斷止連續の關係に於ける形態的變化であるが、かやうな事は日本語の文法事實上如何なる地位に在るべきものであるか。活用事實は、種々の文法諸事實中如何なる位置を占むるものであるか。活用といふことの内容を説明するに先立ち、先づかやうなことから考へてかゝらねばならぬ。

雑多な文法事實を、それが先行的に行はれて行く觀念的構造と、後行的に行はれて行く文法的構造とに分析することが出来る。此の兩者は全く相反する文法的事實として對立すべきものであるが、又互に相補的關係を以て現實を構へ文を敷く直接的要素となるべき節を成立せしめる爲のもの、即ち成節的なものと、言語材料として或は素材言語としての語を成立せしめる爲のもの、即ち成語的なものとに大別することが出来る。しかして成節的なものは成語的なものを俟つて成立すべきものであり、成語的なものは成節的なものを豫想して成立すべきものであり、兩者の間に亦密接な關係があるのである。右の中成節的なものには更に自動的內生的構造のものと添加的膠着的構造のものがある。陳述語の活用事實といふのは、其の自動的內生的に節を成立せしめん爲の文法事

實に外ならぬ。

普通は活用といふことを、單に語の一部の如く考へてゐる。語の形態部であるかの如く考へてゐる。勿論語彙的方面から考へる場合はさやうに考へなければならぬかも知れないが、之を眞に文法的事實として考へる爲には、單に語の一部分の如き考へ方をしてはならぬのである。接辭などの如く語の成立素ではなく、既に語として成立せるものが更に句とか文とかといふものを成立せしめんが爲に行はれる、語の自生的文法態勢でなければならぬ。語に助詞が添加せられることによつて、語以上の要素物を成立せしめると同様な意味を以て、語が自生的文法態勢となり、語の外に出ることではなければならぬ。即ち節に發現することではなければならぬ。活用の現象は語の自生的態勢である爲、動もすれば語の單なる一部であるかの如く見られ易いのであるが、實は節を成し語を斷續關係の中に編入せしめる要素、節の形成素と見なければならぬものである。

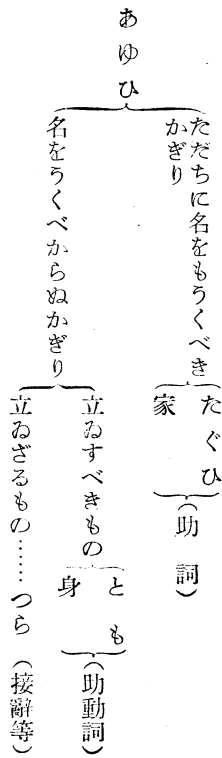
活用は語を節に形成する因素と見なければならぬが、助詞の添加膠着の如きものとは勿論明確なる區別がなければならぬ。かやうなことは從來只漫然と、活用事實と助詞の使用とは當然別途のものでなければならぬと考へられてゐた様であるが、矢張何故それを區別しなければならぬかといふ文法學的理由は明示しなければ、それは單なる常識論的なものに過ぎない。そこに種々の曖昧なる問題も生じて來る間隙があり得るのである。活用形態と助詞添加とは等しく成節的構造であるが、その相異點は、前者は常に先行的であり後者は常に後行的であるといふことである。言ふまでもなく活用の現象は實體語從屬語にはなく、活用語とまで稱せられてゐる陳述語にのみ存する事實であるから、かゝる識別は陳述語に於て先づ考へ之を範例として行かなければならぬ。即ち陳述語にありては活用

現象は常に助詞添加に先行して行はれ、助詞添加はかゝる活用形態を助成し顯揚する意味に於て常に後行的に行はれるのである。そこに活用形態は助詞添加に對し優先的な成節的構造と言ひ得るのであり、前者を第一次的成節構造とすれば、後者は第二次的成節構造である。

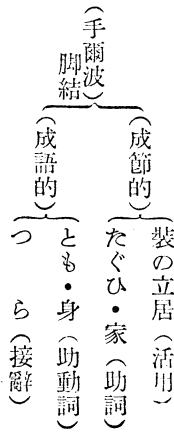
しかし活用形態と助詞添加とのかゝる差異點に就いては容易に辨別し得るであらうが、寧ろ兩者の同一點を認めることが困難なのではないかと思ふ。多くの人々は助詞を靜辭の如きものとして考へ、之に對して助動詞を動辭の如きものと考へ、斯くて兩者を同一範類に收めようとするのである。詞的構造と辭的構造と言つたものを立て、前者には靜詞的なものと動詞的なものとを考へ、後者には靜辭的なものと動辭的なものとを考へ、かくて靜辭に助詞の如きものを配し、動辭に助動詞の如きものを配しようとするのである。しかし、かやうな考へ方といふものは謂はゞ八衢學的な形態論說より發出するもので、専ら活用の有無といふことを楯に執り、之を以てあらゆる文法事實を眺めて行かうとするものである。隨つてそれは所謂活語の如きものにとつては極めて好都合のものであらうが、活語以外のものに對しその積極的なものを把握することは不可能に近いと言はなければならぬ。つまり活用といふことは單なる文法的構造の一部面であつて、文法事實の全面を支配する程のものではないのである。言語の斷止連續の種々相を表示する形態的一領域に過ぎないのである。かやうなものを準尺として文法事實の全面を眺めて行かうとするから、活用といふことに全然無關係のものは只それに對し消極的事實としてのみ把握し得るに過ぎない。それは何處まで行つても八衢學的である。此處に於て活用の有無といふことを除けば助詞も助動詞も同一的な辭と考へざるを得ないのである。殊に西洋文典の流入以來、此の助詞助動詞が恰も彼の前置詞とか助動詞とかといふも

のと同様なものであるかの如く考へられ、専ら他の文法的要素を凌ぎ特立せられるやうになつたのである。しかし助詞助動詞を同一的辭と見るならば、それに劣らず接辭とか活用形態の如きものをも同一的に見なければならぬ。右四つは、何れも文法的構造であるといふ點に於て變りはないのである。かくて八衢を超え更に脚結的な考へ方をすら超えて、遠く歌學的文法學の源流にまで溯つて今一度考直して見なければならぬのである。即ち諸家の點圖とか歌學的文法學者の手爾波研究とかといふものは、活用語尾も助詞も助動詞も接辭も、皆文法的表示素として略々同様に取扱つてゐるのである。かやうなものから出立して富士谷派の文法體系に下ると、そこには「あゆひ抄」があり五屬十九家六倫十二身八隊の如き詳細な分類が見られる。しかし之等は單に並列的なものでなく、

たぐひはその心をとりにてすべたり。家はそのたぐひをえらびてあつめたり。この二まきのあゆひはただちに名をもうくべきかぎりなり。ともはそのことわりをもてよせたり。身は立ぬすべきをたとへたり。つらは此ふたつに似て立ぬざるをつらねたり。この三まきは名をうくべからぬかぎりなり。(あゆひ抄・おほむね上)の如く言つてゐるところから見ると、略々



の如き考へ方をしてゐたのである。右の中最も注意しなければならぬ事柄は、助動詞を接辭などと同一類とし助詞と分離してゐることである。しかして更に一考を要するのは「おほむね下」に於て裝の概要を述べ、特にその文法的構造に關する考説の結果を一表に纏めた裝圖といふものを掲げてゐることである。かゝる脚結と裝の立居の部面とを一括したものが文法的構造の全體となるのであるが、若し成章の之等に對する考を發展せしめるとするならば、略々左表の如くなるのではないかと思ふ。



かくて本居門下であり乍ら、富士谷文法に多大の關心を寄せた鈴木朗の言語四種論を見ると、「活語ニツケルテニヲハ」といふものを舉げてゐる。それは形狀の詞作用の詞の語尾の部分と言ふものであつて、助動詞に對して「詞ノ跡ヲ承テキレモシ、又働キテ下ニツヅキモスル事、活語ノ終リノテニヲハノ如クナルアリ」と言つてゐるやうに、成章の考へてゐる裝の立居とその本旨に於て異なるものと考へなければならぬが、活用語尾を手爾遠波に含めて考へようとした點に就いては看過することは出来ない。

山田博士の複語尾説に對し、之を活用形態的に見ようとするものと接辭と同類的に見ようとするものと二つの考へ方がある。しかし複語尾の眞義は複合語尾の成素といふことであつて、語尾の活用を複雑ならしめるといふこと

でもなく、又單なる接辭の如きものでもない。動詞語尾を複合的に延展するための文法的構造でなければならぬ。それは靡の如き再語尾的なものと異なり、語尾内容を曲折し、より複雑なものとするのであるが、活用體系そのものに何等の變動を與へるものではない。そののみか、却つて活用範疇によつて規定せられ活用形態によつて動くもので、活用といふことは異次元的な文法的構造でなければならぬ。故に山田博士の複語尾説の如きものを楯にとつて活用と助動詞との近寄せをすることは不可能である。さらばと言つて單なる接辭の如きものとも考へてはならぬ。接辭は安藤正次氏などによつて造語的成分とまで謂はれてゐるやうに、文法的に新語を形成するための要素でなければならぬ。然るに助動詞は、之を動詞語尾に接合して行くことにより語尾の複合體を形成せんとするものである。動詞そのものを新に形成せんが爲に接合せられるものではなく、動詞の語尾の部分を特に新にし複雑なものにせんが爲に接合せられるものである。故に接辭は眞の成語素であるが、助動詞は語の一部に對する成語素、即ち動詞語尾に對する形成素である。山田博士の説かれる複語尾はかやうな意味に解さなければならぬと思ふ。

以上で活用の事實が文法諸事實中如何なる地位に在るべきものであるかといふ事を一互り考へて見たのであるが、要するに活用といふことを餘りにも誇大視し、恰も文法事實の全面を支配する原理的なものであるかの如き偏向的形態論説に陥つてはならぬ。我が國の文法學は、何れかと言へばかやうなものに煩はされて來たのである。しかし又活用を單に陳述語の一部分と考へ、語の形態部的なものに關踏せしめて考へてもならぬ。活用は、語彙的なものを超えて活動する文法的構造の一つでなければならぬ。助詞と共に言語の斷止連續の種々相を指標し、節を成し句を構へ文を敷くための要素でなければならぬ。自動的内生的ではあるが、それは成節的因素でなければならぬ。故

に成章が装抄に纏めんとする考説からその活用形態に關する所説を選抄し、装圖の如きものに纏めて「あゆひ抄」の卷頭に掲載した精神をどこまでも發展せしめて、活用事實の真相を認識して行かなければならぬのである。

二

活用といふことは助詞添加と共に節形成の爲の文法的構造である。成節的構造である。しかもそれは常に助詞の添加に先行して行はれる性質のもので、成節的構造の第一次的なものと言はなければならぬ。勿論活用は單に成節的な爲にのみ行はれるものではない。助動詞などの膠着する成語的必要に應ずることも考慮しなければならぬ。かやうな事が又第二次的成節構造とも言ふべき助詞の添加などには絶對にあり得べからざる點であり、活用事實の一特徴ともなるところであらうが、併しそれは活用にとつて先決的なものではない。成節的構造としての活用が先づあつてさやうな事が行はれて行くのである。助動詞膠着の爲に活用といふことが生じたのではなく、活用に對して助動詞膠着が行はれるやうになつたと考へなければならぬ。しかし助動詞膠着が一旦制約的となるや、其の活用を定着せしめ支持して行き、結果が原因となり原因が結果となる如きこともあるのである。

活用にとつて一義的なものは節を成すことであり、語を成すことは二義的事實でなければならぬ。故に活用を考察する爲には先づその斷續法を知り、然る後それに對する助動詞膠着の如きものを見て行くのが順序であると思ふ。此處に於て活用を先づ斷止法のものゝと連續法のものゝと大別する。勿論斷止法に屬する活用形でも、それに連續の助詞が添加する時は連續法となり、又連續法に屬する活用形でも更に之に斷止法的文法工作を加へることによ

り斷止法となることがある。例へば口語の終止形に「が」「のに」「ものを」などの如き助詞を添へたものは連續法となり、文語の連體形が「ぞ」「なむ」「や」「か」を、已然形が「こそ」を受ければ斷止法となる。しかしかやうなことは第二次的成節構造によつて然なれるもので、第一次的成節構造としての活用に於ては何處までも終止形であり、或は連體形已然形でなければならぬ。又斷止法のものに斷止の助詞、連續法のものに連續の助詞が添加して行けば、その斷止法なり連續法なりが益々顯揚せられるのであるが、かかる助詞添加形そのまゝが活用形ではない。例へば動詞の命令形に助詞「よ」が添加せられた場合にはその命令法が一般に強化せられ、而も一段系動詞の如きは「よ」の添加がなければ命令機能が殆んど顯れないと言つてもよい位である。條件形の如きものも同様である。それは現行語にあつては、「ば」とか「ども」とかといふやうな助詞添加がなければ條件的機能は殆んど未顯に終るのである。しかしかやうなものと雖も、何處までも分析的に見て置かなければならぬのである。活用形と添加助詞とは明かに區別しなければならぬのである。如何に合一的と見えても、活用は活用であり助詞は助詞である。前者は第一次的成節構造であり後者は第二次的成節構造であり、兩者は異次元的成節法でなければならぬ。所謂譬の如きものと「よ」とを同一的に考へてはならぬのである。かゝる區別を忽緒に附し、單にその連續の疎密的様相に依るとすれば實際界限がないのである。その極、あらゆる助詞添加を一種の活用の如く見なければならぬ結果ともなるのである。例へば西洋流に、名詞に「の、が、に、を、と、へ、より、から、で」などと言つた活用があるとも考へられない事はないのである。しかしかやうに進めて行くと文法的構造總てが活用的となり、斯くてその活用的現象に對し又何等かの區別範疇を立てなければならぬこととなる。しかもその區別と言へば、恐らく又、現在活

用と稱してゐるものと助詞添加、或は助動詞とか接辭とかといふ如きものとならざるを得ないのではないかと思ふ。活用は斷止連續の二に大別するのであるが、その中、斷止するものには動詞系形容詞系活用共に存する正常的な敘述的斷止、即ち終止形をとるものと、動詞系活用にのみ存する行動的な對稱的斷止、即ち命令形をとるものとある。しかし終止形は連續助詞などの力で未だ連續可能のものであるが、命令形は絶對的非連續のものである。故に斷止力から言へば、前者より寧ろ後者の方が強力であると言はなければならぬのである。勿論命令形とは言ひ條、命令の外に希求、許容、放任等種々のものがある。しかし何れにせよ命令形は言語行動の裸體的表示の陳述である。連續するものには種々のものがあるのであるが、修飾、補充、統合、並列の四範疇の中で活用に關係あるものは

修飾と並列の二法のみである。修飾諸法の中、活用範疇に關係あるものは勿論陳述語が先行し修飾素となる場合だけである。しかしそれには實體語に連なる連體的修飾のものと、陳述語に連なる連用的修飾のものとがある。前者は動詞にも形容詞にも同様に存するのであるが、後者は動詞に稀で、主として形容詞に存するのである。副詞法などと言ふものは形容詞の連用的修飾法に外ならぬ。並列法にも種々あるが、先づ陳述語を單純に同格的連用する重加的のものと、種々の複雑な意味性を持つて前件後件が並列する複合的なものとに區別することが出来る。後者は更に綜合的なものと分析的なものとに分れるが、綜合的なものは主として助詞添加に依據し活用として特殊の形態を發達せしめて居らず、こゝで直接關係あるものは分析的なものでなければならぬ。分析的なものとといふのは前件が後件の生ずる條件として考へられる條件連用である。しかしして嚮の重加法と此の條件法とは連續的活用に直接關係あるものである。勿論重加法にも條件法にも活用として特別な形態にまで發展してゐないもの

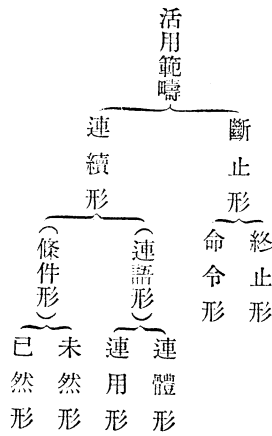
ある。單に終止形とか連體形とかといふものに然るべき助詞を添加して之を表示してゐる如きものもある。しかしそれらの外に重加法には連用形と稱せられるものが成立して居り、條件法の中には條件形とも稱せらるべきものが成立してゐるのである。條件形の成立せるものは、種々の條件法中必然條件を表示するものに於てである。しかし必然條件には



の如きものがあり、順續戻續は助詞を以て表示せられ、未然已然是活用の表示するところである。随つて條件形には一般に未然條件形と已然條件形とがある譯である。

以上の中、斷止法の終止、命令、及び連續法の連體修飾、重加連用、未然、已然是、特殊な活用形態にそれ／＼一義的に對應するものであるが、連用修飾は重加連用と形態的に同一である。随つて活用論上、副詞形などといふものを立てることは不適當である。副詞形の考は形容詞の方から立てたのであるが、動詞の方からは更に名詞形とか中止形の如きものを考へることも出来る。名詞形は動詞が居體言的なものに轉化して行く形態であり、連體形が準體言として轉用せられるものなどと共に、成語論的分野に屬すべきものであるから、成節的構造としての活用に於ては附帶的なものでなければならぬ。中止形の概念に對しては二重に解釋することが出来る。之を所謂重文の

前句を形造るものと考へれば重加連用の一法に過ぎず、省略述法的なものとすれば又別問題でなければならぬ。故に何れにせよ、副詞形とか名詞形中止形などといふことは必要なる範疇であり、之等はよろしく重加連用の中に包攝せしめ、斯くて連用形の種々なる機能領域として考へて行かねばならぬのである。重加連用が連用修飾を攝取して連用形といふ範疇として立つならば、連體修飾は單に連體形としなければならぬ。此處に於て



の如く、六つの活用形を定立することが出来るのである。

右六活用形は我が國文法學史上の長き試練を経て創造せられたる尊き成果である。特にそれは八衢學の功績であると思ふ。しかし本居春庭の詞の八衢はかゝる活用範疇に主眼を置き、所謂活用形の定立を念とするものではなかつた。勿論活用といふことを論ずる以上活用範疇に對し相應の考慮を拂はなければならず、殊に八衢の名目そのものがかゝる活用分岐の現象より來てゐることは春庭の左の言を以てしても知ることが出来る。

これを詞八衢としも名つけたるよしは、おなじ言の葉もその活ざまによりていづかたへもおもむきゆくものにし

しかしそれは只かゝる八衢現象といふものに對し靈妙を感じ、その言靈の働を世の人々に示さんが爲、形態的見地から一つの學體系に纏めたものであつて、進んで八衢の範疇を定立し、八衢現象の本質を究め、言靈の眞の核心から之を解明せんとするものではなかつた。宣長が紐鏡、玉の緒に於て、我が國歌文の上に現象する審美的文法力を、係結の三轉に纏めようとした如き犀利な學的睿智がそこに働いてゐない。春庭の業績により活用範疇といふことに就いては一步も進められてないのである。寧ろ其の門鈴木朗の活語斷續譜に於てそれが見られるのである。斷續譜には柳園叢書本の外に神宮文庫の本があるのであるが、その神宮文庫本では

トホリ 此等ニハ	一行ゴト	ニ詞一ツ	ヅツヲ標	擧タリコ	トくク	ハ活用抄 ヲ見テシ	ルベシ
本語ニテ	トマル	トエツミ	ク	キル、ヤ	ニツバク	カシニツ	ヅク
下ノ詞ニ	ツバク	ハモガニ	ツマク	ナリニツ	ラシニツ	ヨカニツ	ヅク
ベシニツ	ヅク	ランニツ	ヅク	一クサソ	オホスル	ツバク	ヅク
下ノ詞ト	並ベム	キシケリ	アリニツ	古文バモ	オホスル	ナカレノ	ドニツバ
現在ニテ	ク	命スルコ	トバ	ジナクシ	コ、ロノ	ル	ク
未來ニテ	ク	ムマシニ	ツバク	ズヌナク	ニツマリ	オホスル意	オホスル意
シムニツ	ズリ	令ノ心ノ	スニツァ	ク	(略ス)	ナニツマ	ナニツマ

飽 ク ア	ケ キ カ	
ク 一 等		
ク 二 等	ゾ ソ ニ ツ マ ク ヲ ニ ツ ミ ナ リ ニ ツ ヅ ク ゾ ノ ヤ 何 ム ス ビ	
ク 三 等		メ リ ニ ツ ヅ ク
キ 四 等	コ ハ ロ ノ リ ナ ノ ト マ 轉 ジ テ ハ 體 ノ 詞 ト ナ 作 用 カ ギ レ リ	
ケ 五 等	ク コ ソ ノ 結 ビ	
ケ 六 等		
カ 七 等	ネ ガ フ 意 ノ ナ ム ニ ツ ッ ク	
カ 八 等		

の如く活用を八等に範疇づけてゐる。しかし、柳園叢書本では

第一格	活語格						
飽	ケク キカ	此ノ段ニハ一行ゴ トニ詞一ツヅハラ 標 ^シ アグクハシク ハ活用格ヲ考ヘ見 ルベシ					
ク		本語ニテ キレスワ ル	第一段				
ク		下ノ詞ニ ツバク	第二段				
ク		ベシニツ ツク	第三段				
キ		下ノ詞ニ 並ベ連ク	第四段				
ケ		現在ニテ バニツバ ク	第五段				
ケ		オホスル コトバ	第六段				
カ		未來ニテ バニツバ ク	第七段				

の如く、神宮文庫本の七等八等を一つにし、七段に範疇づけてゐるのである。之は神宮文庫本に「此二等ワクルニオヨバス一ツニスヘシ」と注記してゐる考を實現したものか。しかも此處で特に注意しなければならぬことは、神宮文庫本ではその範疇づけの條件として、陳述語の斷止連續に加ふるに、添接せられる助詞助動詞等をも同様に配意してゐるのであるが、柳園叢書本では神宮文庫本で先決條件的に擧げられてゐた、陳述語の斷續相のみを以て之を範疇づけんとしてゐるのである。即ち第一次的成節構造の範疇に對し、第二次的成節構造の助詞添加や成語的構造の助動詞接合等、副次的なるものの纏綿して來ることを次第に排除し、優先的に活用現象自體を以て直接的に範疇づけんとしてゐるのである。かやうなことを更に徹底すれば、柳園叢書本の範疇づけに於ても、第一段が第三段の「ベシニツバク」を攝收し、「トニツバク」と共に之を、「本語ニテキレスワル」に消去せしめられなければならぬのである。かくて次の如く六段となるべきものである。

第一段 本語ニテキレスワル（終止形）

第二段 下ノ詞ニツバク（連體形）

第三段 下ノ詞ニ並ヘ連ク（連用形）

第四段 現在ニテバニツバク（已然形）

第五段 オホスルコトバ（命令形）

第六段 未來ニテバニツバク（未然形）

かやうな斷續語の活用範疇は何處から系統を引いてゐるのであるかと言へば、矢張富士谷成章の裝研究に端を發し

てゐるものと考へざるを得ない。勿論、斷續譜そのものは宣長の御國詞活用抄に基礎を置き之を繼承してゐるのであるが、斷續譜をして活用範疇的に前進せしめ活用抄以上に出でしめた力は、裝圖や裝抄にあつたと言はなければならぬのである。一體本居派の活用研究といふものは活用の外形に傾き、常に五十音圖に依據せんとするものである。此の源流は更に眞淵の語意考、殊に初體用令助の考に溯ることが出来るのであるが、兎に角本居派では、活用研究の最も本質的な部分である活用範疇を、専ら五十音圖の段によつてゐるのである。然るに富士谷派の活用研究は、五十音圖などといふものに餘り拘泥することなく、只管活用事實そのものに直接觸れて行かうとしてゐるのである。活用事實そのものの中から活用範疇を生み出さんとしてゐるのである。それは次の裝圖に明かである。

事								本				無末無靡			
事								末				無末有靡			
思	打	見	得	寢	爲	來	居	靡引							
おも	う	み	う	ぬ	す	く	う								
ふ	つ														
		ル	ル	ル	ル	ル									
ひ	ち	み	え	ね	し	き	み								
へ	て	み	え	ね	せ	こ	み								
ほは	た	み	え	な	せ	こ	み								
		レ	レ	レ	レ	レ									
有末無靡								立本							

斯くて活語斷續譜を見るに、その等段の排列といふものは五十音圖を全く超越してゐるのであつて、此の點のみから考へても已に斷續譜は富士谷派の裝研究から系統を引くものであるといふことが頷けるのである。しかも更に之を仔細に見ると、裝圖と斷續譜とはその等段排列の一々に就いても略々相一致してゐるのである。

〔語幹〕 〔終止〕 〔連體〕 〔連用〕 〔已然〕 〔命令〕 〔未然〕

本 末(引靡)……………往……………目……………來……………(靡伏)

詞 一段(三段) 二段……………四段……………五段……………六段……………七段

右の中、裝圖の末は無靡の終止形連體形、靡(引)は有靡の終止形連體形及び有引であり、斷續譜の一段(三段)は終止形、二段は連體形であつて、兩者交錯して居り、又裝圖の靡伏は已然形の一形で斷續譜の五段の一部に對應すべ

装												
狀												
鋪	芝	在	孔									
戀	早	遙	有	越	恨	落	拾					
こひ	はや	かなる	あ	こ	うら	お	す					
し	し	り	り	ゆ	む	つ	つ					
き	き	る	る	ル	ル	ル	ル					
ク	く	り	り	え	み	ち	て					
		れ	れ	え	み	ち	て					
		ら	ら	やえ	み	とち	て					
				レ	レ	レ	レ					
ケ	け											
カ	か											
有末有引				有末有靡								

きもので、雙方位置を異にするが、其の他は全く同一である。更に進んで装圖に於ける諸名目の精神と斷續譜に於ける等段注文とを比較して見るに

末……………本語ニテキレスワル（第一段）

目……………現在ニテバニツツク（第五段）

來……………未來ニテバニツツク（第七段）

などの如きは兩者殆んど同様のものである。かやうな譯で、斷續譜は宣長の活用抄を繼承し之に基礎を置き乍ら、成章の装研究に傾きその系統を引くものである。即ち朗は本居門下であるが、更に富士谷文法を研究し、本居文法をして別次元的視面に出でしめたのである。此處に於て宣長が手を染めた活用研究の正統は春庭によつて承け繼がれ一先づ大成せられたのであるが、一方朗は富士谷派の装研究を採用し別系統のものを派生せしめ、かくて春庭に對立したのである。さうしてそれが纏て八衢學發展の重大なる契機となつたのである。此の春庭、朗の兩活用論を統一し、八衢學といふものを眞に大成したのが東條義門に外ならぬ。

殊に和語説略圖に於て

將然言 連用言 截斷言 連體言 已然言 希求言（友鏡では「使令」として欄外に掲ぐ。）

の六活用形を定立し得た功は我が國文法學史上特筆すべき事柄であると思ふ。以後の八衢學者と言ふものは只その補正を爲し、範疇の名目を改變したに過ぎぬ。

春庭が八衢に於て行つた活用研究の本質は如何なる點にあるのであるか。それは活用範疇といふことよりも、所

謂活用語の類別をした點に價值ある業績を残したのである。活用範疇は活用現象を横斷する作業であるが、之は活用現象を縱斷し陳述語の活用類型を立てることに外ならぬ。活用事實に依る語の範疇づけである。思ふに本居學派では、恰度かやうな活用類型を認識するに都合のよいやうに、その活用研究が發足し進展してゐたのである。それは嚮にも少しく觸れた如く、五十音圖を媒介として活用現象を認識して行つたことである。一體五十音圖、殊に五音といふことは、古來我が國言語學の一樞軸となつてゐたのであつて、五音相通五韻連聲の秘事とか通略延約の説などといふことも皆かやうなものから發出してゐるのである。それが活用現象の認識をも媒介し、斷片的には夙くから言及されてゐたのであつたが、之を眞に統一的に説明してゐるのは、谷川士清の日本書記通證中に載せた

倭語音通

言	往	立	指	書	遇	一聲
ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	體韻
						韻
ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	定未
						韻
フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	定已
						韻
ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	人告
						韻
ホ	ノ	ト	ソ	コ	ヲ	言自
						今按倭語活用
						自有音韻次序
						今借態藝十字
						以發揮其義但
						首尾遇請兩韻
						取通音非正義
						也蓋第五之
						ナ韻皆非雅語

十六會……二十二會（上二段活用）

二十三會（ア行下二段活用）

二十四會（カ行サ行三段活用）

二十五會（一段活用）

二十六會（クシキ活用）

二十七會（シクシキ活用）

の如く類別してゐる。しかも漢字三音考を見ると、各段に對し

第一ノ音 アカサタナ
ハマヤラワ
は未だ然らざるに用ひ、

第二ノ音 イキシチニ
ヒミイリキ
は方に然るを下へ云ひ送るに用ひ、

第三ノ音 ウクスツヌ
フムユルウ
は方に然るを云ひ定むるに用ひ、

第四ノ音 エケセテネ
ヘメエレエ
は然せよと令するに用ふ。

の如く範疇づけてゐる。春庭の詞の八衢は、かやうな宣長の活用研究を繼承し完成したものである。そこに活用範疇は常に五十音圖の段に支配せられ、眞の文法的事實に即することが出來ず、而もそれに對してさ程まで學的配意が爲されてないが、活用事實による活用語そのものの類別作業は徹底的に行はれてゐる。春庭の八衢業績といふものは活用類型による陳述語の分類といふことにあるのである。しかし、かやうなことも陳述語以外にまで逸脱して

行つてはならぬ。活用事實を内生せしめてゐる陳述語を、活用の如何を以て範疇づけることは文法的構造の認識上極めて必要なことであるが、活用の有無などといふことを以て機能範疇論を支配してはならぬ。活用といふことは言語の本質的事實ではなく、本質事實より溢出せる一現象に過ぎぬ。かやうなことは如何なる結果を生むかと言へば、それは當然不活用語に於ける積極的事實を見失ふことになるのである。特に從屬語は考慮の圏外に置かれ、或は不徹底な考察に終始するのである。之は八衢學の餘弊である。しかしてかやうなことが期の言語四種論に端を發し、富樫廣蔭の詞の玉橋を経て西洋文典流入まで續いたのである。勿論八衢それ自體はこの弊に陥つてゐるものでない。よく活用論としての分を守り、何處までも陳述語の範圍内でその考察を止めてゐるのである。のみならず、此處で一つ注意しなければならぬことは、八衢上前半の汎論的な部分では専ら活用抄で爲された如き活用類型の認識を完成せんとし主として四種の活を論究してゐるのであるが、上後半及び下の各論的な部分では、更に活用抄的な考から一步出ようとしてゐる點である。それは如何なることであるかと言へば、活用抄では五十音圖の行的配意が段的配意に單に從屬し未だ積極的意味を有してゐないのであるが、八衢各論では、先づ活用語を活行によつて分ける活行といふことは從來は只然言はれてゐるだけで、文法的事實として殆んど顧みられてゐないのであるが、私は更に詞の通路で爲されたやうな動詞の自他的區別にも發展するのである。隨つて從來は通路に對しても八衢と只單に獨立的に考へられてゐたのであつたが、兩者は連續的發展的關係に在るものでなければならぬ。活用抄が八衢

汎論に於て略々完成し、更に八衢各論から通路にかけて春庭獨歩の境地に出でたものである。詞の八衢の眞の發展は、後世の八衢學的方向と共に通路的方向に進まなければならなかつた。しかしかやうなことは實は現今の文法學的水準に於てすら未だ一つの課題である。

三

八衢學の中心問題は、活用語の活用事實を討究し之を活用類型に纏め、陳述語に對して活段的範類を與へることであつた。それは歌學的文法時代に於て只斷片的に考究せられてゐたものであつたが、國學的文法時代に入るや漸次統一的に體系づけられんとする氣運に進み、遂に本居學に於てそれが大成確立せられ、以後の八衢學派が之を紹述し補正し、斯くて今日に至つたものである。今日誰しも四段活用、上二段活用、下二段活用、上一段活用、下一段活用、奈行變格活用、良行變格活用、加行變格活用（加行三段活用）、佐行變格活用（佐行三段活用）、久活用、志久活用などといふことを知らないものはない位になつてゐる。未然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六活用形と共に右の十一活用種は中等學校に入學するや、先づ口にするところである。しかしかやうなものを以て活用現象が十全に説明し了せるかどうか。私は之に就き今一度考へ直して見なければならぬのではないかと思ふ。殊に現行の正變十一の活用種別といふものは所謂五音の窓から眺められたものであるが、かゝる活段的考察の外に、春庭が嘗て試みた如く活行的考察を爲さねばならぬと思ふのである。

之に就き先づ思ひ出されるのは、黒澤翁滿が言靈のしるべに於て、四段の活とか一段の活とかといふ段活の外に

三行の活とか二行の活などと言つた行活を擧げて居り、又富樫廣蔭が詞の玉橋に於て、四韵一韵などの詞に對し音雜の詞といふものを立ててゐることである。之等は勿論それ自身として雜駁なものであり考察の示範とする程のものではないが、私はかやうな考へ方が活行的考察の先づ最初に來なければならぬものであると思ふ。即ち四段活、變格、三段活、二段活、一段活の如き單行的活用のもと、久活、志久活の如き複行的活用のもとを先づ區別しなければならぬのである。私は前者の如きものは主として動詞に於て行はれるところから動詞系活用、後者の如きものは主として形容詞に於て行はれるところから形容詞系活用と言ふのである。一體八衢の主力を注いだのは右の中動詞系活用であつて、形容詞系活用に對しては委しく論じて居らぬのである。その爲か一般の八衢學者にあつても、説くところは主として動詞系活用以、形容詞系活用に對しては常に冷淡な取扱をして來た嫌があつた。只鈴木朗の言語四種論、東條義門の山口栞、黒澤翁滿の言靈のしるべ、富樫廣蔭の詞の玉橋、權田直助の形狀言八衢等に於て比較的注意すべき論説を見ることが出来るのである。しかし右の中鈴木朗、權田直助の形狀言説は、私の言ふ形容詞系活用の外に、良行變格活用「あり」の類を加へるものである。かやうなものを何故に加へるのであるかと言へば、恐らくその觀念的特質の上からも來てゐるのであらうが、文法上の説明としては終止形が「い」の韻であるからであると言ふのである。即ち作用言は、終止形は總て第三の「う」韻であるが、形狀言の方は「し」又は「り」で第二の「ス」韻であると言ふのである。之は一見極めて巧妙なる説であるが、實は一つの偶然的事實を捉へて居るに過ぎないのである。其の證據に、文語の場合はさうであつても口語では「あり」は「ある」となつて「う」韻となつてしまふ。然らば文語で形狀言であつたものを、口語では作用言に考へなければならぬのであらう

か。勿論文語と口語とはその體系を異にする。文語には文語の機構性があり、口語には口語の機構性があり、兩者を混同して論じてはならぬのである。しかし活用語尾の變動とか語の轉成轉用と言つた、語彙的方向に傾ける文法的事象ならばいさ知らず、かゝる範疇上の大問題が同一言語内に於て、單なる一語形の轉化の爲一舉にして逆轉するなどといふことはあり得べきことではない。しかも同じ文語内でも上の論法を以てすれば、形狀言「あり」が「あらむ」「あらず」などとなり「う」韻をとれば作用言と考へなければならぬのでなからうか。かやうなことを言ふのは如何なるところから來てゐるのであるかと言へば、畢竟五音的考へ方活段的考へ方を何處までも固執して行かうとしてゐるからである。活行的に解決すべきところをも活段的に考へて行かうとするからである。此處にも八衢學的原理の誤れる流用の一例があるのである。

右の動詞系活用と形容詞系活用との中には、又それ／＼種々のものが區別せられるのである。之に就き、裝圖に於ける末と靡との有無に關する考へ方は極めて注目すべきものであると思ふ。勿論裝圖に於て狀の中に在を擧げ、芝や鋪の如き形容詞系活用と同列的に考へてゐるところに對しては前述の理由により賛意を表することが出来ない。在は孔に準じて事の一類として考へなければならぬのである。觀念的性質に眩惑されて活段的な偶然的一致の邪路に踏み迷つてはならないのである。しかしそれ以外の縦行に關する考へ方、殊に末の有無と靡の有無とに關する考へ方は活用語の活行的認識にとつて價值ある考へ方と思ふ。即ち先づ動詞系の事を、無末と有末とに分けてゐる。末といふのは終止形を基準にして考へたものであるが、一般的には語幹と分立せる語尾を言ふのである。かくて無末といふのは語幹が即ち變化語尾ともなるもので、眞に語尾と稱すべきものの特立してゐないものである。有末は

之に反して語幹に對し變化語尾が明かに分立したものである。次に無末有末に於て再語尾とも言ふべき靡の有無を認め、それ／＼無靡有靡といふことを區別してゐるのである。此處に於て裝の中、事に對して次の四範疇を立てるのである。

無末無靡 無末有靡

有末無靡 有末有靡

又事に對する狀に就いては

有末有引 有末有靡

の二範疇を立てゝゐるのである。即ち兩者は第一次的な語尾とも言ふべき末を有してゐる點に於て一致するのであるが、前者は有引であり後者は有靡である。靡は動詞系の場合の如く、再語尾或は第二次的語尾とも言ふべきもので、鋪狀は末「し」に再添する「き……」の如く明かにさやうなものを有してゐるのである。然るに芝狀に就いて見ると、「き……」は「し」に再添するのではなく「し」と對立的に本に直ちに附いてゐるのである。故に之を靡と區別して引と言ふのである。

裝圖に於けるかやうな考へ方は如何なることを意味するのであらうか。先づ動詞系活用の無末有末といふことから考へる。動詞に於ける無末活用有末活用といふことは語幹と語尾とが綜合的であるか、分析的となるかといふことを先づ意味すると思ふ。即ち語幹自體が活用して行くものであるか、將又語幹から分出せる語尾の部分が活用して行くものであるか、之を成章の用語を以てすれば、本がわたりを爲すものであるか、末がわたりを爲すもので

あるかと思ふことであると思ふ。しかし現在見る日本語動詞に於て、本がわたりを爲すものは極めて少數で、多くは本がわたりを爲すものである。しかも本がわたりを爲すものの中でも、純一にそれが行はれる、例へば成章の挙げた「居」の如きものは殆んど活動して居らないばかりか、化石語としても極く稀なものである。かやうなことから推察すると、或は無末活用動詞は有末活用動詞に比し極めて古い動詞、謂はゞ動詞の始源的状态でなからうかと思ふのである。日本語の動詞が名から分立した最初の状態はかやうな無末的なものでなかつたらうか。一體、無末動詞は一段、二段、三段、四段、變格などと段活的にも錯雜を極めた内容を包括するものであるが、有末動詞は正格の四段と二段（口語では一段）といった様にその内容は極めて齊一的となつてゐる。つまり前者は通時的に未熟であり、後者は幾度か類推作用的鍛鍊を経たるものとして通時的に成熟せるものと言ふことが出来るのである。かやうなことから無末活用は有末活用に比し古い動詞の活用状態であり、有末活用は無末活用上に成立して行つたものであるといふことが推定出来るのである。次に無靡有靡といふことは、本に對する末の分出に前後して成立して行つた再活語尾の有無である。かゝる二次的な再活語尾の無いものは古く、有るものの方が新しいといふことは又一般的に言へると思ふ。即ち無末無靡は無末有靡に比して古い活用であり、有末無靡は有末有靡に比して古い活用であると考へることが出来る。しかし末の有無はかゝる靡の有無といふことよりも先決的でなければならぬ。故に極く大體的ではあるが

無末無靡→無末有靡→有末無靡→有末有靡

の如き順序で動詞系活用が漸次發達して來たものでないかと思ふ。

右は通時的考察であるが之を一般的に或は共通的に言へば如何なることになるのであるか。それはわたり系活用と靡系活用との二類に集約することが出来る。わたり系活用といふのは母韻變化的活用であり靡系活用といふのは再語尾「る」「れ」を分出せしめるものである。勿論前者は第一次的であり、後者は第二次である。前者は古代的であり、後者は近代的である。兎も角、かゝる二類の活用原理が組合せられて様々の活用種が現出するのである。その中前者を代表するものは四段活用であり、後者を代表するものは一段活用であると言はなければならぬ。即ち四段活用に於ては最も第一次のわたり性を發揮せるものであり、一段活用に於ては最も第二次の靡性を發揮せるものである。故に私はわたり系の活用に四段系活用と稱し、靡系活用に一段系活用と稱するのである。

次に形容詞系活用に就いて考へてみる。成章は矢張先づ末の有無を問ひ、次いで引又は靡によつて芝狀と鋪狀とを區別するのである。しかし再語尾的な「けれ」「しけれ」の「れ」に對し、裝圖の上では何等考慮が拂はれて居らないやうである。随つて先づこの點から少しく吟味して、然る後引靡末と次第に内部へ向かつて論じて行きたい。勿論此の「れ」は裝範疇上さまで重要なものではないのである。殊に萬葉時代に溯ると形容詞に對するかやうな再語尾現象は殆んど見られないのである。而して「こそ」の結は

己が妻こそ常めづらしき。(萬葉・十一ノ二六五一)

最も今こそ戀はすべなき。(同上・二七八一)

野を廣み草こそ繁き。(同上・十七ノ四〇一一)

の如く連體形を以てせられ、又條件法は

戀しけば形見にせむと。(萬葉・八ノ一四七一)

たまきはる命惜しけどせむすべもなし。(同上・五ノ八〇四)

畝傍山木立うすけど頼みかも毛津の若子のこもらせりけむ。(舒明紀)

の如く「けば」といふ形を以てし、或は

かくだにも國の遠かば汝が目欲りせむ。(萬葉・十四ノ三三八三)

左努山に打つや斧音の遠かども寝もとか兒ろがおゆに見えつる。(同上・三四七三)

の如きものもあるのである。故に「けれ」「しけれ」の「れ」は形容詞系活用にとつては本質的なものでなく偶然的なものでなければならぬ。形容詞の根本性を動詞程のものではなく、副次的なものでなければならぬ。然らばそれは如何なる意味で副次的であるか。私はかやうなものを總て動詞性への駢馳であると考へたいのである。元來我が國の形容詞と稱するものは單に實體觀念を形容するばかりではなく、述格的地位に立つことの出来る陳述語の一つである。動詞と共に陳述作用を具有せる、所謂用言である。此の點西歐語の形容詞などと著しく異なるのであるが、併し一方陳述力の旺盛な動詞と對比的に活動してゐるのであるから、常に不安定なる陳述語として在るのである。自身不徹底なる陳述語として常に向動詞的一面を有してゐるのである。此處に於て我が國言語史上、形容詞は種々の形で絶えず動詞的方向へ動搖してゐるのである。「け」に「れ」が附いて「けれ」「しけれ」の生じたのも斯様な一つの表れとして考へなければならぬのである。之と略々同様に考へべきものとして「かば」「かども」の如き「か」に「ら・り・る・れ」の附いて生じた所謂カリ活である。カリ活は普通形容動詞などと稱せら

れてゐるが、形容動詞といふ名目は寧ろ我が國の形容詞の特徴を表示するものと言ふべく、カリ活の如きもののみが形容動詞ではない。カリ活は形容動詞的な我が國形容詞の、動詞的方向への一動搖的現象である。何も取立て、言ふ程の特異な機能範疇が生じた譯ではない。已然形「けれ」「しけれ」と同様の意味のものとして考へて行かねばならぬのである。只前者は「れ」の一形のみ殘存しカリ活は比較的連帶的であると言ふことが出来る。しかしそれも文語だけのことで、口語ではも早退化し用例は極めて局限せられ、その連帶性はばら／＼になつてゐるのである。

斯く考へると「れ」を除いた形容詞系活用には「か、き、く、け」の如く外形上動詞の加行四段活用と略々同様な語尾變化が見られ、此處にも亦形容詞の動詞的方向への動搖現象が在るのである。そこでかゝる纏綿的現象を排除し、更に古代へ溯ると

いた泣かば人知りぬべし。(記下)

吾思ふ心いたもすべなし。(萬葉・十五ノ三七八五)

今うたばよらし。(記中)

あなおもしろ。(古語拾遺)

高光る日の皇子

宮柱太知り

或は

遠々し越の國（記上）

宇豆久志乎美奈（宇饒）

みづみづし久米の子（記上）

細し戈千足の國

ながながし夜

の如きものがある。前者は芝狀のものであり後者は鋪狀のものであるが、かやうなものが恐らく形容詞の原形であらうと思ふ。しかしてかかる原形は舊に古代に於て活動してゐたばかりではなく、現代に於ても種々の狀態で行はれてゐるのである。例へば

あいた。

おゝあつ。

おゝさむ。

おゝこは。

あゝしんどうや。

あらおかしや。

あらおもしろや。

あなうれし。

うたてや。

ありがたや。

あなう世の中。

右は斷止法的であるが、文語では外に「の」を介して連體法的に使ふ。例へば

面白の春雨や。

あな面白の景色やな。

心幼な業や。

心な村雨や。

あさましのこの身や。口惜しの有様や。

あな恐ろしの物語や。

の如きものである。以上のものに就いて見るに芝狀のものには「し」がなく、鋪狀のものには何れも「し」が下接してゐる。かやうなことは如何なることを意味するのであるか。一體芝狀の觀念的内容は一般に感覺的であり、鋪狀の觀念的内容は一般に情緒的である。勿論かく感覺的とか情緒的とかといふことは必ずしも心理學的に嚴密なるものではなく、極く大體的なもので、或は前者は外面的形而的、後者は内面的思念的などと言つてもよい。兎も角芝と鋪とは内容上外と内、物と心、觀と念と言つた區別がある。それは出入の多い微妙な錯雜した境界であるが、一言にして表さんとすればかやうな區別があるのである。かやうなことに關聯して、一面又、芝は本能的であり鋪は構成的である。「赤」「長」「圓」「甘」「臭」「痛」「善」「惡」などとしても向形容詞的であり、根的なものがそのまま形容詞原形となるべきものである。然るに「淋しい」「美しい」「羨しい」「戀しい」「懐しい」等は、根的なものそのままでは向名詞的であつたり向動詞的であつたりして、必ずしも形容詞原形とはなり得ないのである。そこに「し」が下接しなければならぬ理由があるのである。「し」を下接せしめることによつて根的に形容詞性でないものを形容詞原形に構成しなければならぬのである。

「し」は形容詞の形成素であると言つてよい。動詞の形成素は常に何等かの形で母韻變化的であるが、形容詞の

形成素は不變化語片でなければならぬ。動詞素は變化的動的であるが、形容詞素は「し」の如く不變化的靜的なのである。随つて動詞には必要に應じて更に助動詞の如きものゝ膠着があるのであるが、純一なる形容詞にはかゝる動的分岐を意味するものの膠着は絶対にないのである。「し」の性質は大略以上の如きものであり、又芝根鋪根の性格は前述の如きものであるとすれば、「し」は何れに優先的に添着すべきか。それは言ふまでもなく鋪根でなければならぬ。芝根は「し」が無くとも或期間、更に今日に於ても結構形容詞としての面目を保つことが出来るのである。然るに鋪根には必ず「し」が添着しなければ、それは形容詞たるの資格に立つことが出来ないのである。今日新形容詞の創造せられる場合、常にかゝる手順を経て鋪根に仕立てられるのである。然らば芝狀に「し」が如何にして附いたか。それは類推作用と考へるより外に途がない。鋪狀の「し」は本能的で芝狀の「し」は類推的である。しかして鋪狀で「し」となることがあるのは、更に芝の「し」の類推と思ふのである。

しかし從來の學者はこの「し」に對して全く反對の意見を稱へて居つた。例へば權田直助の形狀言八衢ではこはもとより、あさ、ふか等に對へて、うれし、かなしといへるが本言にて、將然連用はうれしく、かなしく截斷はうれし、かなしと連體はうれしき、かなしきなるをしと同音重なるときは一音略きて截斷にてもうれし、かなしとのみいへる事と知られたり。

と説明し、以後多く之に従つて來たやうである。しかし、同音重なる云々と言つても、實際にさやうな事例を示さねば机上の空論に過ぎない。そこで小田清雄氏は嘗て次の三つの證歌を示されたことがある。(皇典講究所講演)
秋深み夜風烈ししうべしこそ四方の里人衣うつなれ。(永長二年東谷歌合)

家苞にさのみな折りそ櫻花山の思はむこともやさしし。(基俊集)

何ものも常に見るにはいとほししいつもあかぬは粥と大乘。(無住雜談集)

しかし之等は何れも「烈し」「やさし」「いとほし」などといふ形が成立して餘程の時を經過して後に發生した事例で、「しし」から「し」が出來たことを立證し得ざるのみか、却つて「し」から「しし」を形成したことを物語つてゐると言はなければならぬ。實際「しし」といふ形は平安末鎌倉以後、可成に頻發した形跡があるのである。その例を二三擧げると

君ノ顔色アシ、ヲソラクハ鬼神ノ爲ニヲカサレタル歟。(續古事談・五)

見苦シ、トク／＼罷出ヨト云。(平家延慶本)

云出セバハヅカシシ、又浦山シサニ手向ヲスルニテ候。(三體絕句三ノ二九才)

それも戀しく又これもいとほしし。(諸曲・唐船)

笠の内あやしし、見いれ立のけば(曾我物語)

祇王にも劣らず、歌の音のよさよ、美しし／＼と嘆られたり。(源平盛衰記)

泣くはわれ、なみだのぬしはかなししぞ。(閑吟集)

世の聞えも恐ろししとあつて急ぎ高雄へ送り奉られた。(天草本平家)

かやうな鋪狀に於ける「しし」の發生現象は、略音説などでは到底説明がつかないのである。さらばと言つて延言の如きものでもなく、兎も角之を單獨的にのみ解決しようとしてゐる以上、事の真相に到達することの出來ないも

のでなければならぬ。故に少くとも、鋪に對立する芝との交流に於て考へて行かねばならぬのである。例へば

(赤) : (美し)

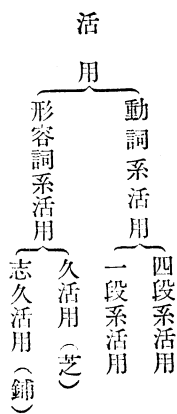
(美し) : (赤し)

(赤し) : (美しし)

(美しし) : —

の如き關係に於て「しし」の形が發生してゐるのである。かやうなことから裝圖の引磨の區別の如きも、其の眞の源由は芝と鋪との末の性格に在ると言はねばならぬのである。即ち鋪の末は原本的であるが、芝の末は未だその類推的痕跡を止めてゐるものである。鋪の末に對する芝の末の關係は、芝の末に對する鋪の「しし」の關係と殆んど同位的である。

以上の考察によつて活用の縱的範類を略々次の如きところまで求めることが出来る。



右の中形容詞系活用は範類の究極に到達したものであるが、動詞系活用は尙種々に類別の歩を進めて行かなければ

ならぬ。しかしかやうな點に就き、春庭はその八衢に於て、或は更に通路に於て、極めて注目すべき業績を残してゐるのである。春庭のかゝる活用研究は形容詞系活用には餘り注意を向けず、視點は只管動詞系活用にあるものであるが、之に就き「やちまた上」の概説の部で次の如く述べてゐる。

活はすべていとおほくさま／＼なる中に四種の活もともそのたぐひさま／＼ひろくいとおほくしてこれにならぶはたらき他にはなし次にたゞしきしく又しきくとはたらく詞のみなりその餘の活はこれにくらぶればいとせばく詞もすくなしさてしきしくしきくとはたらく詞もいとおほけれどこはたゞ「加」行のみの活にて其餘の行にかくはたらくたぐひの詞なければ猶せばきを四種のはたらきは「あ」「か」「さ」「た」「な」「は」「ま」「や」「ら」「わ」の行におしわたりてこと／＼くその活あるうへに行毎に又四種三種あるひは二種などづつの活も有ていとさま／＼ひろきにしがひてその詞もいとおほしかゝれば先この四種のはたらきをさとさむとてくだり／＼の圖などあらはし次々にそのよしくはしく書しつその餘の種々の活は別にあらはすべし斯くて「やちまた上」の後半以下はその具體的體系を展開したものであるが、ここでは先づ動詞系活用を「あ、か、さ、た、な……………」の行別に範疇づけてゐる。次いで所謂四種の活に類別し、更にかゝる後行部的類別に對し、語幹別を暗示する先行部的識別による排列を施してゐるのである。しかして各語に就き必要あるものには又それ／＼その出典證據を擧げてゐるのである。かやうな春庭の活用認識の眞意は如何なところにあるのであるか。勿論そこには、後の八衢學者によつて繼承せられた如き活段的認識は光つてゐる。しかし、かゝる活段的認識は何かと言へば宣長の活用抄に磨を掛けたものに過ぎず、活用抄の傳と言つた性質のものである。故に春庭の眞面目

を見んとするには、かゝる活段的認識よりも寧ろ八衢群小學者などの餘り氣に留めなかつた、行別的認識の方向に求めなければならないのである。それは如何なることであるか。先づ春庭は形容詞系活用を一時考察の外に置き専ら動詞系活用に注意を向けてゐるのである。形容詞系活用は音雜とも稱せられてゐる如く、若し之に行別的考察を施さんとする場合には一度活行的分析を経なければならぬ。しかもかく活行的分析を経たるものと雖も、簡単に動詞系活用と同一面上に考へらるべきものではない。故にかゝる形容詞系活用を一時括弧の外に置くといふことは、行別的認識に於て當然執らるべき方法でなければならぬ。次に動詞系活用を類別するにしても先づ正格に規準を置き四種の活を擧げ乍ら、各行別に於ては變格にも注意を拂ひ、しかも奈行變格の如き四段系のは四段の次に配し、加行佐行變格の如きものは一段二段の次に配してゐる。又正格活用の排列も

四段 一段 中二段 下二段

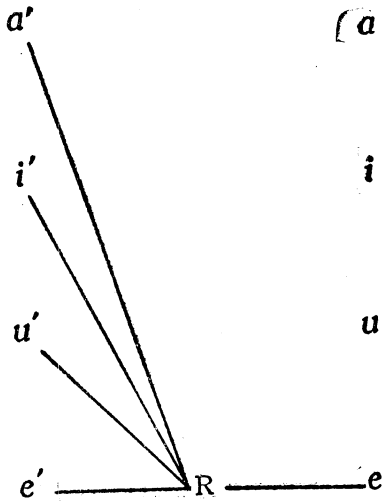
の順序をとり、一段を四段の次に配してゐるのである。故に春庭の動詞系活用の序列の眞意は恐らく



の如きところにあつたと思はれる。

動詞系活用現象を行別的に考察する時、四段系は一義的で一段系は二義的である。一段系は四段系の分岐形と見

なければならぬ。一體、動詞系活用は如何なる因素によつて成立してゐるのであるか。それは語尾母韻の屈折的變化と再活語尾（R）の添着とに外ならぬ。如何なる動詞系活用も結局はこの二因素の組合せによつて成立してゐるのである。しかし四段系活用は専ら前者の語尾母韻屈折によつて成立して行かうとする原本的活用種であり、一段系活用は前者に後者が加はり、而も只管後者の再活語尾の添着を以て活用現象面を支配して行かうとする新生の活用種である。しかし一段系活用は所謂良行變格再轉格の如く

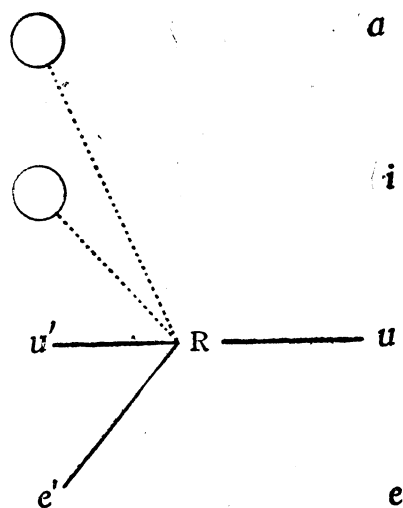


例、行け
レルリラ

活動せ
レルリラ

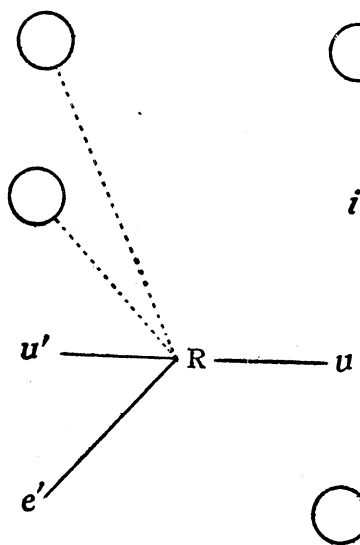
と言つた風に、再活語尾が原本的活用の全面に立塞り、再び四段系的なものに轉活したものであつてはならぬ。一段系となるには原本的なものと新生的なものとの混合體系として雜活相を呈してゐなければならぬ。両者がそれぞ

れ充實したものとして對立してゐるのではなく相補的でなければならぬ。しかし縱、雜活的でも

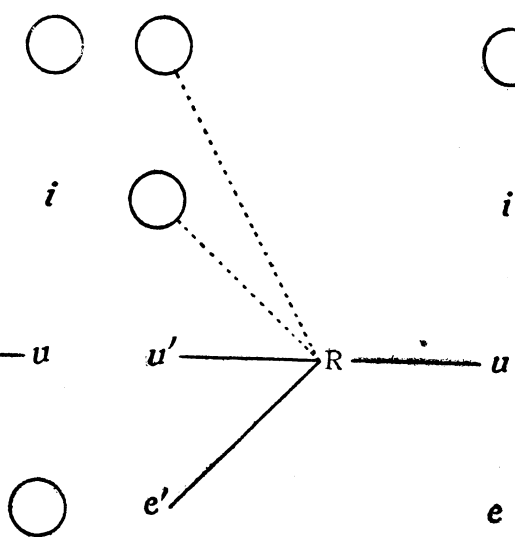


例、死
ネヌヌニナ
レル

の如く原本的なものが十全に残されてゐては一段系ではない。それは四段の變格活用の外ならない。一段系に傾くためには原本的なものが新生的なものによつて動かされなければならない。例へば



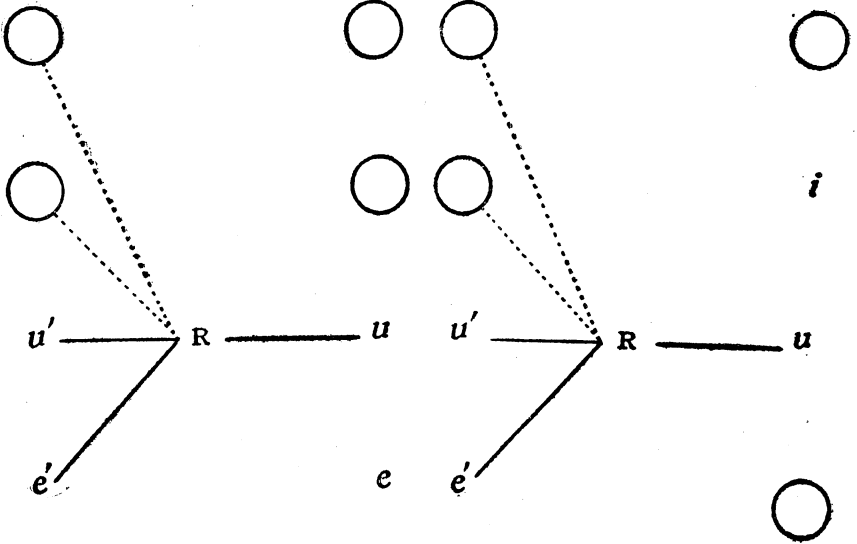
例、
(来)
コクククキ
レル



例、
(爲)
セススシ
レル

或は

第七章
活用
論



例、

受

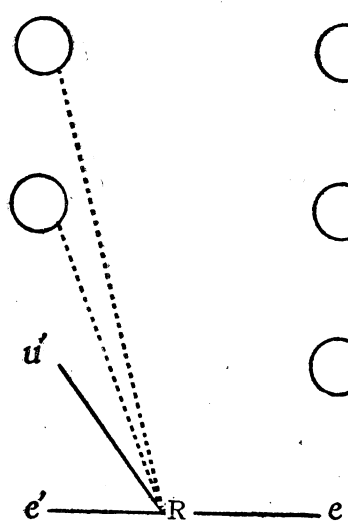
ケククク
レル

例、

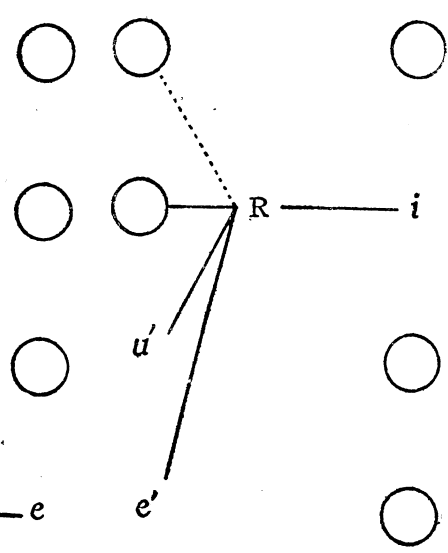
起

クククキ
レル

の如きものでなければならぬ。更に

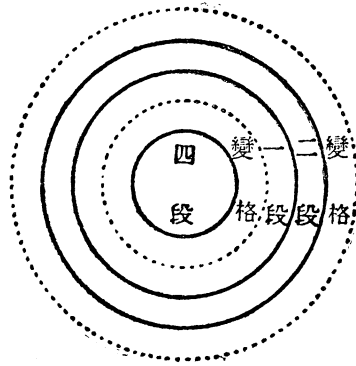


例、
(蹴)
ケケケ
レル



例、
(見)
ミミミ
レル

の如きものに至つてはその極限的理想に到達したものと云はなければならぬ。かゝる一段系の方は、四段系の活行的性質を次第に忘佚する方向である。三段二段と進展するに従ひ漸次活行的配意が背後に退き、一段活用に至つては全く活段的配意のみとなり、その極原本的四段そのものの活行的配意をも抹殺しようとする。我が國活用の歴史には、常にかゝる古代的力と近代的力との交替現象が働いてゐるのである。形容詞系活用は動詞系の活用の方動いて居り、次第に複雑化せんとする傾向にあるが、動詞系活用はかく單純化の傾向に動き寧ろ形容詞系の活用の如きものに近づかんとしてゐるのである。しかし形容詞系活用は何處までも形容詞系的でなければならず、動詞系の活用は何處までも動詞系的でなければならぬ。それ／＼の本質は永久に失ふものではない。形容詞系活用の動詞系の活用への傾向は一方又その形容詞性の爲に打碎かれ取戻されて居り、動詞系活用の形容詞系の活用への近寄せは原本的動詞性の爲に阻まれ、殊に一段系活用の如きも常に四段系活用によつて支へられてゐるのである。一段系の極限理想に到達した一段活用の如きも、今一步出づれば良行四段の變格の如きものとなる可能性があるのである。現に口語の「蹴る」などはさやうな道程に在ると言ふことが出来る。兎も角四段系一段系の對立の具體的統一者は、矢張四段系的なものでなければならぬ。四段系的なものを失つた動詞系活用は、其の活用性の破滅といふことより外はない。故に四段系は一義的で一段系は二義的であると言ふのである。動詞系活用では、種々の一段系的なものが四段系に抱擁せられて生起してゐるのである。或は四段系を正格的とし一段系を變格的と考へてもよいかも知れぬ。随つて動詞系活用の眞義を究めるには、どうしても四段系を基礎とし一段系に及ぼす方法をとらねばならぬのである。即ち圖示すれば



春庭のかゝる八衢考察に於て如何なることを發見したか。之に就いて更に二つの道が開けてゐる。その第一は成章が裝研究に於て爲したと考へられる本・末の性質を究めて行く方向である。それは例へば

- | | |
|--------------|---------------|
| (消す) : (消つ) | (失す) : (うちつ) |
| (足す) : (足る) | (貸す) : (借りる) |
| (沈む) : (しづく) | (臨む) : (のぞく) |
| (祝ぐ) : (譽む) | (薄らぐ) : (薄らむ) |
| (重ぬ) : (嵩む) | (束ぬ) : (捆む) |

或は

(故 す) : (故 り) : (難 る)
 (降 す) : (降 り) : (下 る)
 (こぼす) : (こぼり) : (こぼる)
 (鳴 く) : (鳴 す) : (鳴 る)
 (轟 か) : (轟 ぐ) : (轟 る)
 の如き成語的究明である。第二は成章も幾らか先鞭をつけてゐたやうであるが、春庭が通路の上で行つた自他の認識である。それは活行的認識の發展として、先づ「同行にて自他のわかるゝ」ことに氣附いたことが中軸となつて展開したものであらう。しかして之を「同じ行にてわかるゝと佐行にうつりてわかるゝと羅行にうつりてわかるゝと」の三原則に纏め、その具體的體系を示してゐるのである。同じ行にてわかるゝといふのは四段系から一段系の分岐せるものである。かやうなものの中に

あからむ あく あふむく
 あらだつ いる いたむ
 うかむ うく うる(賣)
 かがむ かなふ くぼむ
 くるむ くつろぐ こむ
 しづむ しろむ しわむ

しりぞく　すすむ　しわむ

そふ　そむ　そむく　そろふ

たがふ　たつ　ちかづく

ちがふ　ちぢむ　つく　つづく

とどく　なつく　ならぶ　のく

ひそむ　ひらむ　ふす　みつ

むく　やすむ　やむ　ゆがむ

の如く四段系が自動で一段系が他動なるものの外に

くじく　くだく　くびる

さく(裂)　さばく　しをる　とく

ひしぐ　ひらく　ほどく　むく(剥)

もむ　やく　やぶる　ぬる

の如く四段系が他動で一段系が自動なるものもある。更に四段系一段系的對立があつても

すたる　そる(逸)　もる(漏)

しのぶ　もみづ

の如く共に自動的なるものがあり

うつむ　くるむ　みだる　わく

まなぶ

の如く共に他動的なるものもある。しかもかゝる分裂が全然行はれないものもあるのである。又佐行にうつりてわかるゝもの、羅行にうつりてわかるゝものの中には

盡く——つくす

起く——おこす

過ぐ——すぐす(すぐす)

朽つ——くたす

浴む——あむす

懲る——こらす

明く——あかす

更く——ふかす

肖ゆ——あやす

費ゆ——つひやす

燃ゆ——もやす

動く——うごかす

驚く——おどろかす

靡く——なびかす

及ぶ——およぼす

散る——ちらす

照る——てらす

又は

塞ぐ——ふたがる

續ぐ——つがる

除く——のぞこる

埋む——うづまる

掛く——かかる

避く——さかる

助く——たすかる

止む——とまる

据う——すわる

の如く成語的なものもあるが、多くは助動詞「す（せる）さす（させる）」「る（れる）らる（られる）」「等の

着によつて相分れるのである。斯く見て行くと春庭の通路といふものは、その内容に於て未だ精選せらるべきものであり、一方又その考察原理とも言ふべき自他の觀念そのものに於て已に誤解せられ易く、充分に究明發展せしめるところがなければならぬのである。しかし活用の研究に於て敢然行別的发展方向に進み、當時かくまで精緻なる學體系を構成し得た春庭の學才に對しては、誰しも敬意を拂はざるを得ないであらう。

四

今日行はれてゐる正變十一活用種は、只單に五音的な窓から眺め活段的に考察せられたものであるが、私は更に今一度活行的に見直さなければならぬのではないかと思ふのである。春庭の八衢研究の如きものも後の八衢群小學者によつて繼承せられた活段的考察ばかりではなく、更に深く活行的考察の基礎があつたと思ふ。雑多な活用現象から只抽象的に活段を歸納して行つたものではなく、かゝる活段を活用種として纏め上げるに就いては確固たる活行的基底の上に立つてゐたと考へざるを得ない。それが一面に於て通路の如き成果となつて表れるに至つたのである。活行的考察は活用性を析出する。活用性は活用種の成立因である。即ち活用は先づ動詞系と形容詞系の二に大別することが出来る。前者の原本的なものは母韻變化的であり、後者の原本的なものは母韻不變化的である。しかして前者の母韻變化的なるものにRの母韻變化的靡が交錯して、次第に母韻不變化的方向に進まんとするものが一段系への分岐であり、後者の母韻不變化的なるものにKとかRとかの母韻變化的語片が加接して次第に母韻變化的方向に進まんとするものが現行形容詞活用現象である。故に現在では、動詞系は第一次的な四段系と第二次的な一

段系とが對立平行してゐるが、形容詞系は第一次的なものが第二次的なものの裡に隠れ從屬的となつてしまつてゐる。かやうな現象も只無意味に然在るものではない。形容詞系は只管動詞系に追隨せんとしてゐるが爲、原本的な芝鋪の區別の如きものを忘れてまで、或は加行的となり或は「けれ……」を生ぜしめ、更に又カリ活の如きものを生ぜしめてゐる。しかも現行口語などでは、活用上芝鋪の區別を全然失つてゐるのである。久活志久活とも「く、い、けれ」三活である。然るに動詞系は形容詞系に步調を揃へんとする働がないとは言へないが、それより春庭の言ふ自他の表現識別とか受容性遂行性などと言つたものの爲四段系に一段系が對立するやうになつたのであるから、かやうな識別を必要とする間はそれに支持せられて兩者が平行的に存立して行くであらう。しかしかく言へばとて、自他表現の如きものと四段系一段系の對立の如きものとが必ずしも照應一致するとは限らない。又必ずかゝる對立がなければならぬといふ譯ではない。そこに通時的に能記所記的の喰違が生じ、その極、一方が消失することもあり、或は又かゝる對立が未成のまゝで持續してゐることもある。併し乍らかやうな通時的變異相を以て一般論的事實を無視してはならぬのである。四段系一段系の對立は自他的表現の如きものに支持せられてゐるといふ原理性を否定してはならぬ。次にかゝる四段系一段系にもそれ／＼變格といふものがあるのである。變格といふのは如何なることであるか。それは所記の伴はない能記的變異である。文法機能は正格と同様であるに拘はらず、外形のみ偏向せるものである。即ちこゝでは自他的變異性の伴なはざる活用種の變異である。之には積極的なものと消極的なものとある。前者は四段系から多少一段系へ偏向せるも、依然として四段系的なるものである。後者は四段系を超えて一段系的となれるも、尙外形的に四段系の名残を留めてゐるものである。前者を四段系變格、後者を一

段系變格と稱する。四段系變格には二種類ある。それは言ふまでもなく奈行變格と良行變格とである。この兩者は只活行の子韻的相異のみではなく、活用 of 的偏向性にもそれ／＼特徴を有するものである。即ち前者は「な、に、ぬ、ねる、ぬれ、ね」の如く完全なる四段活用 of の外に一段系の成立因である R 磨の添着せる活用を有するものであり、後者は「ら、り、る、れ」の如く母韻變化 of の外形は四段活用 of 的であるが、i 韻 of 的「り」が u 韻 of 的「る」の機能領域に侵入せるものである。かゝる傾向が若し進展して活用の全領域を i 韻 of 的「り」が占有してしまへば形容詞系活用 of の原形にも似たものとなるべく、その中道に於て磨が添着すれば一段活用となるべき端緒にあるものである。しかし右兩變格とも現行口語では正格に引戻され四段活用となつてゐるのである。一段系變格にも二種ある。それは所謂加行變格と佐行變格とである。之等は母韻變化 of 的數から言へば一段活用二段活用或は四段活用に對して三段活用とも稱すべきものである。しかして前者は「こ、き、く、くる、くれ」の如く a u の中間音である。韻 of 的活用が混入し、後者は「せ、し、す、する、すれ」の如く a i の中間音 e 韻 of 的活用が混入してゐるが爲未だ上二段——上一段となり得ないものである。しかし現行口語では次第にかやうな方向に動きつゝあるのである。以上のやうな正格變格的變動は、動詞系活用種 of 的副次的偶然的變形に過ぎない。動詞系と形容詞系とが對立し、動詞系 of 的原本的四段系から一段系が分岐したやうな、活用性 of 的ものから來る本質的な活用種別 of 的成立とは言ひ得ないのである。然るに R 磨の添着といふことによつて四段系から一段系 of 的分岐が成立した以前に於て、様々な活行的子韻 of 的相異による活用種 of 的識別が行はれ、かやうなものが又次第に *by* *the* の如き相對に統一されて行かうとする傾向にあつたものではないかと思ふ。勿論、現在ではも早かやうなことは化石的 to 一部分殘存してゐるに過ぎず、只通時論的技術を通

して辛うじて之を再構し得るのみである。殊にかゝる文法的現象と相前後して、一方日本語の子韻組織といふものに一大變動があつたと考へられる。萬葉和歌の書記作業とか記紀の編述事業などといふものはその末葉に位置するものである。所謂上代特殊假名遣に見られる

○○○え○

○き○けこ

○○○○そ

○○○○と

○○ぬ○○

○ひ○○へ○

○み○め○

○○○○よ

○○○○ろ

○○○○○

等の音韻的識別はその餘端に過ぎないと思ふ。その爲種々に活動してゐた活行的識別の如きものも漸次忘佚せられるやうになり、現在では自他の表現乃至受容性遂行性の表現の如きものすら、種々雑多な手順方式を混用することによつて行はれてゐる始末である。随つて眞の意味の活用種といふものは矢張次の如きものとなるのである。

活用種別

動詞系活用

四段系活用

正格(四段活用)

奈行變格活用

變格

良行變格活用

一段系活用

正格

一段活用

上一段活用

下一段活用

二段活用

上二段活用

下二段活用

變格(三段活用)

加行三段活用

佐行三段活用

形容詞系活用

久活用

志久活用

右の活用種をそれ〴〵活段的に見れば略次の如くである。

四段活用 a i

u

e

奈行活用 a i

u

u-ru

u-re

e

良行活用 a i

u

e

第七章 活用論

同上口語	志久活用	久活用	同上口語	三佐段活用	同上口語	三加段活用	下二活用	上二活用	下一活用	上一活用
ク	(シ)ク	ク	i	i	i	i		i		i
	(シ)	シ								i-ru i-re
イ	(シ)キ	キ	n-rn u-re e	u u-ru u-re e	u-ru u-re	u u-ru u-re	u u-ru u-re e	u u-ru u-re		e e-ru e-re
ケ レ	(シ)ケ レ	ケ レ			o	o				

即ち活用變化數は奈行變格活用が六つ、三段活用が五つ（口語のものは四つ）、四段活用、良行變格活用、二段活用、久活志久活が四つ（口語の形容詞活用は三つ）、一段活用が三つといふやうに、活用種によつてまち／＼である。然るに活用範疇の方は嚮に述べた如く常に

未然 連用 終止 連體 已然 命令

の六つでなければならぬ。そこで奈行變格の如く變化形が六つのものは

(未然) (連用) (終止) (連體) (已然) (命令)

死な 死に 死ぬ 死ぬる 死ぬれ 死ぬ

のやうに活用範疇とそれが恰度對應するのであるが、他の活用種ではさうはいかぬ。即ち變化形が五つの三段活用に於ては

(未然) (連用) (終止) (連體) (已然) (命令)

こ き く くる くれ こ

せ し す する すれ せ

の如く、加變では^oが、佐變では^eが未然命令の二つの機能領域を占有することとなる。（口語では更に^u-^{ru}が終止連體の二つを領有する。）又變化形が四つのものに於ては

(未然) (連用) (終止) (連體) (已然) (命令)

咲か 咲き 咲く 咲く 咲け 咲け

有	ら	有	り	有	り	有	る	有	れ	有	れ
起	き	起	き	起	く	起	くる	起	くれ	起	き
受	け	受	け	受	く	受	くる	受	くれ	受	け
赤	く	赤	く	赤	し	赤	き	赤	けれ		
美	しく	美	しく	美	し	美	しき	美	しけれ		

の如く、四段ではuが終止連體の二をeが已然命令の二を、良變ではiが連用終止二をeが已然命令の二を、二段ではi(e)が未然連用命令の三を、久活志久活では「く(しく)」が未然連用の二を領有することとなる。(口語の形容詞活用では更に「い」が終止連體の二つを領有する) 又變化形が三つの一段活用に於ては

(未然)	(連用)	(終止)	(連體)	(已然)	(命令)
み	み	みる	みる	みれ	み
け	け	ける	ける	けれ	け

の如くi(e)が未然連用命令の三を領有する外、i-ru(e-ru)が終止連體の二を領有することとなるのである。

かやうな活段的認識は我が國文法學史の上で徐々に行はれ今日に至つたものであるが、其の最も急激に發展をした時期と言へば文化文政の年間である。しかしてその前期に於て本居春庭と鈴木則とが先づ二つの異なる見地から之に手を染め、かくてその後期に於て東條義門が兩者を統一し略々今日の如きものと成したのである。即ち春庭が八衢に於て立てた活段は能記的な變化形からであり、而も九音的なものに支配せられてゐたが爲に、四段活用を基

準にして他の活用種を規定したのであつた。そこで奈變、二段、三段等では終止連體に當る形が一つの活段中で分立して居り、奈變では所謂下知の詞となる變化形が一つの活段中で分立し、そこに活用圖式上に矛盾餘剰が生じてゐるのである。かやうに春庭の如く變化形的側面から若し活段圖式を立てるならば、最も變化形の數の多い奈行變格活用を以て基準としなければならなかつたのである。之に反して朗は斷續譜に於て立てた活段は所記的な活用機能からであつた。そこで最初の中は雜多なものを立てゝゐたのであらう。しかし已に述べた如く神宮文庫本の如きものでは八等に纏めて居り、更に柳園叢書本では七段としてゐるのである。斯く精選して行つた方向といふものは二義的な助動詞連續の排除であつたらしく、八等から七段に進むに就いて第八等の「シムニツバク、令ノ心ノスニツバク」を削除して居り、而も尙第三段「ベシニツバク」を残してゐるのである。此の「ベシニツバク」を削除しさえすれば略々今日の六段となるのであるが、朗は遂にそれを爲さなかつたらしく、又義門の出發もそこからではなかつた。義門は友鏡に於て先づ將然言、連用言、截斷言、連體言、已然言の五轉を擧げ、その欄外に使令を小書してゐる。若し朗の斷續譜から出發し之を基本としてゐたとすれば、第一に活段の順序を斯く八衢式の五音的に立てなかつたであらう。少くとも原本的な截斷言の如きものを第一轉とするのが自然であると思ふ。しかして躊躇するところなく直ちに六轉を立てることが出来たと思ふ。ところが「八衢疑問」にも見られるやうに、義門は八衢から出立し八衢を基本としてその活用研究を進めたのである。その爲、終止連體を別段として八衢の四活段を五活段的に進めることが出来たが、使令に就いては未だ疑問としてゐたのである。しかし、友鏡に於ける斷續譜の影響も亦見逃すことが出来ない。殊に活用範疇の名目の如きものは、謂はゞ國語を漢語の形に直ただけで殆んど同様

的なものであり、且終止連體の別の如きも實は斷續譜の考を採用したのかも知れぬ。斯く八衢を本とし斷續譜の影響を受け乍ら、最後に到達したところは天保四年の和語說略圖であつた。そこでは使令を希求言として加へ立派に六活段を立てゝゐるのである。かゝる活段を義門は轉乃至は言と稱したのであるが、其他段、階、等、格、法など種々に言はれ、現在では普通之を活用形と稱してゐる。又各活段の名目も義門の將然は未然と稱せられ、截斷は終止、希求は命令と稱せられるやうになつたのである。その大要を例示すれば次の如くである。

一			系 段 四			活用種	活用形	幹語	語	尾
用上二段活	用下一段活	用上一段活	活用良格	活用奈格	四段活用					
起	受	起	有	死	行	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
き	け	き	ら	な	か	き	く	く	け	け
き	け	き	り	に	き	き	く	く	け	け
く	ける	きる	り	ぬ	く	く	く	く	け	け
くる	ける	きる	る	ぬ	く	く	く	く	け	け
くれ	けれ	きれ	れ	ぬれ	け	け	け	け	け	け
き	け	き	れ	ね	け	け	け	け	け	け

五

系 詞 容 形			系 段				
語	文	口	同 (文語)	活用 (口語)	同 (文語)	活用 (口語)	下 二段
用 志久 活用	久 活用	口 語		佐 行三 段		加 行三 段	
美 し	善	美 し	(爲)	(爲)	(來)	(來)	受
く	く	く	せ	せ	こ	こ	け
く	く	く	し	し	き	き	け
○	し	い	す	する	く	くる	く
き	き	い	する	する	くる	くる	くる
けれ	けれ	けれ	すれ	すれ	くれ	くれ	くれ
			せ	せ	こ	こ	け

現在の六活用形が定立せられるまでには種々の道程を経て來たのであつた。それは能記的には五音的變化の如きものから出發し、所記的には雑多な斷續相から出發し、かくて兩者の對應合致せるものが六活用形であり、それは

義門の和語説略圖に至つて略々完きものとして定立せられたのであつた。即ち一は本居派の體から發し他は富士谷派の用から出で、それが義門の研究に於て體用合致の六活用形として統一せられたのである。しかし、活用形といふものは要するに雑多な斷止連續の諸方式を指標する範疇に過ぎない。複雑多岐なる陳述語の機能を表徴する謂はば記號的なものに過ぎない。故に各活用形の有する機能領域といふものは單純なるものであり得ない。その領域内は種々の色どりで隈取られ又他の領域と交錯してゐるのである。かやうなものの中には第一次的なものと第二次的なものとある。前者は陳述語そのものの斷止連續の法であり、後者は陳述語への助動詞膠着である。随つて後者は前者に對して副次的附傭的に成立してゐるものであり、而も成語法として別に項を立てて究明すべきものであるから、こゝでは只前者に就いてのみ一わたり考察して置く。

未然形は四段系活用の a、上一二段活用の i、下一二段活用及び佐行三段活用の e、加行三段活用の o、形容詞系活用のク(シク)などであるが、この第一次的機能領域は極めて狭小である。例へば

死なば諸共

花咲かば鳥啼かむ。

不服あらば訴ふべし。

後思なくば僥倖のみ。

の如き順續未然のみである。殊に口語では

そんなことを言ふならこちらにも考がある。

それだけのお金ならば私が差上げます。

の如き用法の外にない。しかし第二次的な助動詞膠着は活用形中最も豊富である。連用形は四段系活用上二段系用及び三段活用のい、下一二段のえ、形容詞系活用のク（シク）などであるが、その機能領域の中心的なもの

死に失せる。 咲き亂れる。

有り難い。 見分ける。

起きかける。 蹴破る。

うけ取る。 來辛い。

しらす。

白く美しい。

の如き並列連用である。右は語の連結であるが

花が咲き鳥が啼く。

足にも左右があり、目にも耳にも左右があります。

蝶は花から花に舞ひ、蜂は蜜を集めてゐる。

五時に起き、八時に寝る。

胸圍も大きく、概評も甲であつた。

の如く句を連結するものも同様である。又

無いと言つても少しはある。

少しぐらゐ高くても買ひませう。

死んでも忘れぬ。

の如く^死屍續未然の形で連結することも出来る。其の他

新年おめでたう。

番町で目あき盲に道をきき。

の如き中止述法が行はれ、動詞では

早くおうで。

この本をよんで見な。

の如く命令法的なものに用ひられることがある。又名詞の資格に準ぜられ更に名詞に轉ずることがあることから名詞法とも稱せられ、或は文語では「なそ」格として禁制法に立つことが出来る。動詞の連用形が名詞法と稱せられることがあるのに對し、形容詞では之を副詞法などと稱せられることがある。それは

白く光る。 早く走る。

嬉しく思ふ。 淋しく歸る。

の如き修飾連用があるからである。之も語の連結のみではなく

此の上もなく尊い。

力強く人々の胸に響いた。

の如く句の連結も行はれるのである。しかしてかゝる修飾連用は單に形容詞ばかりではなく

かき曇る。 とり亂す。 相成る。

の如く動詞に於ても行はれることを忘れてはならぬ。

終止形は四段活用奈行變格活用及び文語の三段活用では *u*、口語の三段活用は *u-ru*、良行變格活用では *i*、一段活

用では *i-ru* 又は *e-ru*、形容詞系活用では文語は「シ」口語は「イ」などであるが、その機能領域の中心は言ふまでもなく

花見に行く。 もう死ぬ。

ぢあ、かうする。 五時に起きる。

誤解がとける。 捜しに来る。

そんなことを言ふな。 訴へるぞ。

不良分子を一掃せむとす。

我此所に在り。

天氣が好い。 來て呉れてうれしい。

いいとも、 少し長いぜ。

の如き終止法である。しかし種々の連続法にも用ひられるのである。それには然るべき接續助詞の添加といふこと

がなければならぬ。先づ「と」「とも」を添へて¹尾續未然を構成することが出来る。例へば

譏るとも苦しまじ、²響むとも聞入れじ。

徒に身をなしつとも玉のえをたをらでさらにかへらざらまし。

嵐のみ吹くめる宿に花すゝきほに出でたりとかひやならむ。

どこへ行くとも心のまゝだ。

どうするとも勝手になさい。

但し形容詞系活用では

愛敬無くと言葉しなめきなどいへば、

遅くとも十日に來る筈だ。

の如く連用形で行はれる。又「けれど」「けれども」を添へて³尾續已然を構成することが出来る。例へば

ことわるけれども押して頼む。

いやがるけれども仕方がない。

遅いけれどたしかだ。

忙しいけれども御世話は致しませう。

の如きものである。更に「し」を添へて

雨も降るし風も吹くし、今日は止さう。

夏は涼しいし冬は暖い。

の如く連用形的な重加並列をも爲し得る。連體形は四段活用良行變格活用ではu、奈行變格活用二段活用三段活用ではu-ru、一段活用ではi-ru 又は e-ru、形容詞系活用では文語は「キ(シキ)」口語は「イ」であるが、その機能領域の中心的なものは

行く春 起きる時間 尋ねる品

去ぬる三日 賞を受くる人

赤い花 美しい海

赤き心 美しき天然

の如き連體的修飾法である。しかし助詞「の」又は「が」を添へて之を準體言に立たせることも出来、或は私も知つてゐるが親切な人だ。

顔は醜いがよく働く女中です。

財産も無いのに贅澤をする。

隣者でさへなほせぬものをしやうがあるものか。

簾の内に矢をつまよる音のするがその矢の來て身に立つ心ちして (宇治拾遺)

日くれかかりて物悲しと思ふに時雨さへうちこそぐ。

雪とのみ降るだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹くらむ。

そは一度習ひしものを今は忘れたり。

の如く「が、に、を……」等の助詞を添へ綜合連用に立たせることが出来、其の他口語では

そんなことを言ふから憎まれるのだ。

これは大きいからもつと小さいのをこしらへて上げよう。

の如く「から」を添へて理由條件に立たせ、又

落ちるとこはれよう。

家へ歸ると日が暮れた。

餘り長いと折れる。

の如く「と」を添へて當然條件に立たせることが出来る。以上は連續法であるが、文語では尙特別な形で斷止法にも立つことがある。それは

ひかりとゞめず月ぞながるる。

あやしくよそへきこえつべき心ちなむする。

君が思ひのほどやすくなき。

石見がたなにかはつらき。

あまりてなどか人の戀しき。

の如く、「ぞ」「なむ」「や」「か」を受ける場合である。其の他「は」「ぞ」「か」「よ」などを添へ終止に立たせる

ことがある。

已然形は四段活用良行變格活用では e、奈行變格活用二段活用及び三段活用では u-re、一段活用では i-re 又は e-re、形容詞系活用では「ケレ(シケレ)」であるが、その機能領域の中心的なものは 話せば解る。

時が過ぎれば間に合はぬ。

二時までに來ればよい。

勉強すれば上達する。

我御國の爲に死ぬれば遺憾とする所更になし。

一旦緩急あれば義勇公に奉ずべし。

人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬る。

よければ一緒に参りませう。

苦しければもうよしてもよい。

水至りて清ければ大魚すまず。

の如く、「ば」を添へて順續已然に立たせるものである。又文語では 春淺けれど百花爛漫たり。

讀まむとすれど讀みかねしかば上聞に達しぬ。

心こゝに在らざれば聞けども聞えず見れども見えず。

口と言ふは易けれども實際に行ふはかたし。

の如く、「ど」「ども」を添へ戻續已然に立たせ、或は

涙のみこそしたに流るれ。

こころこそうたてにくけれ。

の如く「こそ」を受け特別な終止をなすことが出来る。命令形は四段系活用下一二段活用及び佐行三段活用では上二段活用では、加行三段活用ではであるが（形容詞系活用にはない）、その機能領域は勿論種々の命令法である。例へば

行け行け男兒、日本男兒。

こちらへ來給へ。

これを讀んで見よ。

あゆめよ小馬。

こつちへ來い。

ざま見ろ。

そんなことやめろや。

向かふへ行つて居れや。

の如きものである。

以上は活用による第一次的機能領域の主要であるが、かやうなものに更に種々の副次的意味の助詞添加による、より微細な形態的發展を配意して行けば極めて複雑なものとなるであらう。しかもかゝる第一次的機能領域の外に、第二次的とも言ふべき助動詞膠着の領域があるのである。しかしてその助動詞にはそれ／＼然るべき活用があり、そこには又應分の一次的なる機能領域が成立し、かやうに考へて行くと殆んど無限の領域に廣布するのである。しかし如何に雑多な機能に分岐しそれが如何に廣大な領域を占めるものであつても、歸する所は六活用形に外ならない。六活用形の眞義眞相を縦横にしかと把握すれば、陳述語は自由に之を驅使することが出来るのである。六活用形は陳述語を操縱する大綱である。しかし、かゝる六活用形の形態そのものが陳述語の眞の本質であるといふことは出来ない。活用の有無とか有様とかといふことを以て輕々に機能範疇などを決定してしまつてはならない。六活用形は陳述語の具有する陳述的性格の射出物に過ぎない。謂はゞ本體に對する現象である。故に六活用形の大綱を更に集約すれば陳述性といふことであり、かゝる陳述性の廣げられたものとして六活用形、更に無限に廓大さるべき領域があるのである。